

「ファウスト物語」(茅野蕭々著)

大正 15(1926)年 1 月 15 日第 1 刷発行

昭和 2(1927)年 2 月 5 日第 2 刷発行(岩波書店)

亡児晴子の霊に捧ぐ

緒言

ヴォルフガング・フォン・ゲーテが世界的の大詩人であることは、何人と雖も知らない者はあるまい。そうしてこの偉大な天才の名と共に悲劇『ファウスト』は何うしても離すことの出来ないものになっている。実にゲーテと『ファウスト』とは殆ど異名同人であるかのように考えられている。そうしてそれには全く理由がないではない。

ゲーテが明らかに『ファウスト』の制作に筆を執ったのは 1773 年、即ち彼が 24 歳の頃であって、あの有名な『若いヴェルテルの悩み』を書いた彼の胸の中には、既に『ファウスト』の計画が萌(きざ)して居たということである。事実『ファウスト』の中にも『ヴェルテル』と気分を共通にして居る所が少なくないが、更に此作の起源を遡って考えると、少年時代の空想的な憧憬にまでも及んで居ると云われて居る。斯うして殆どゲーテその人と同時に始まったとも思われる此作が、幾度かの断続と改訂とを経過して、漸く完成されたのは、1831 年の 8 月であって、実に此の偉大な天才が長逝するに先立つこと僅かに 7 ヶ月に過ぎなかった。初めて筆を下ろした時から数えて 58 年、厳密に云ってゲーテは全生涯の間この大作の完成に努力したと云うことが出来る。ただそれ丈でも此作の異常なものであることが知られるであろうが、更に此作を一層重からしめるものは、此の戯曲の中にはあの偉大なゲーテの魂の展開が、その広さに於いても又深さに於いても悉(ことごと)く含蓄されていることである。或る時期、ある機会に於ける詩人の思想感情ではなくて、始めから終わりまでの、長い、変化に富んだ、そして大きな調和を得た彼の生涯が詩化されて此処に再現されていることである。実際或る意味から云うと、戯曲『ファウスト』はゲーテの自伝『詩作と真実』よりも、一層よくゲーテの魂の披瀝されたものである。バイルショウスキ教授が云っているように、此書は実に「一人の人間、而(しか)も偉大な一人の人間が、神を掴み、それによって世界を理解し、そこに生き甲斐のある、神に充ちた、最も善い意味の神の心に叶う生活をしようとの試み」を語っているものである。ゲーテの内面生活の全体が此処に覗(うかが)われる。

それ丈に『ファウスト』は従来可なり難解の書物とされて居り、専門の学者、研究者の間にさえ今尚解釈上の議論が残されている。よしそうした専門的な問題に入らないでも、卒然として此戯曲を読んで十分はその真意が掴み得ない人が少なくはあるまい。これは特殊な様式からも来ているであろうし、又此作の成立した時代等の影響で、本筋とは比較的関係の浅い多くの場面の混じているにも原因するであろう。私は今此の物語の稿を起こすに当たって、主として難解の点を平易に説明し、象徴の意義を啓示し、始めて様式を単一にし、種々の混入物を取り去って、戯曲の本筋を明らかに物語りながら、深遠な作意を損せず、豊麗幽玄な趣致を保存して、出来得る限りゲーテが現わそうとした真意を読者に暗示したいと思った。果たしてそれがうまく成功したか何うかは自ら危ぶんでいるが、尚原作の力に因って、必ず読者の心を引き付ける何物かが含まれていることを疑うことが出来ない。ただ二部合して一万二千百余句、変化曲折の妙と、辞珠(じしゅ)洗練の萃(すい)とを集めた此の韻文戯曲を、こうした物語に書き改めることは、不文の私にとって、難事中の難事であつた。作意をそこねない程度に於いて、幾分の省略や順序の転倒を余儀なくしたことは、予め読者の諒解を得て置かなくてはならない。

例えば私のこの物語は序曲『天上』で始まっているのであるが、ゲーテの原作にはその前に尚『献詞』と『劇場内の前戯』の二つの序がついている。『献詞』は 1797 年、ゲーテが 48 歳の時、所謂『ファウスト断片』を上梓する際に、自分の感慨を抒(の)べたもので、此作を始めた頃に自分を励ました多くの友人が離散したことを嘆いた一種の抒

情詩であり、『劇場内の前戯』は劇作に関する見解が座長と詩人と道化者とで全く異なっているという、今も昔も変わらない真理を対話で現わしたものである。座主は観客の多寡のみを心配し、詩人は一途に作の芸術的価値のみを考える。通俗卑賤な哲学を振り廻して浅薄な理智の圏外に出ることの出来ない座主と、高遠な理想のみを逐(お)って全く現実を顧みない詩人とは、悪魔メフィストフェレスとドクトル・ファウストの二人に一脈の血を引いているところがある。ゲーテは人生の到る処に斯ういう対照を見たのであろう。兎に角、この二つの序は作の本筋と直接に関係がない故、此処にはこれを省くことにした。ゲーテがこの二つの序を加えたのは、作全体が序曲、第一部、第二部の三部から成立しているので、序曲をも亦三つにしたいという様式上の要求にも従ったのであろう。

斯ういう省略は他にも所々無いではないが、大体に於いて緊要なことは細大漏らさない方針を取った。又、戯曲と物語との様式上の相違から来る当然の結果として、----ほんの僅かではあるが----幾分の加筆を取ってしなくてはならなかった。

既に述べたように『ファウスト』の中には作者ゲーテの内面的生活の全体が圧縮されているのであるから、此戯曲及び作者と時代思想との関係、作中の出来事とゲーテ自身の生活との交渉、幾度かなされた改作によっての内容及び様式の変化、又はこの作とその以前にあったファウストの史実、伝説、戯曲、小説等との比較を知ること、一通りは必要なことであり、それ無くしては厳密にゲーテと此作とが理解されないかも知れない。しかし私のこの物語の企ては、前にも述べたように、普通難解として顧みられない傾向を持っている原作の根本思想を、譬(たと)え臆げにでも一般に理解して貰うことを主眼としている。それ故本来無理な仕事を敢えてしながら、第二部をまで物語の形式に書き改めて見たのである。第二部無しではゲーテの真意が徹底しないからである。私は作の味を重んじて説明が不足になりはしないか、説明が過ぎて作の趣が害されはせぬかと、常にそれに苦しめられつつ筆を執った。従ってゲーテ及びファウストの研究家にとっては嫌(あきた)らない点が少なくはないであろうし、以上に挙げたような研究には全く触れる所がなかった。しかし之は他日附録のような形式をかりて巻尾に附する日があるかも知れない。ただ此の物語が原作の読破を刺激し、或いはその解釈上に何等かの助けになることが出来たら私の望みは足りるのである。

尚本書の中に用いた訳語には森鷗外先生に負うものが少なくない。終わりながら謝意を表して置く。

大正 14 年 11 月

東京にて 蕭々

目次

序曲 天 上

悲劇 第一部

- 一 夜
- 二 市門の前
- 三 書斎 --- その一 ---
- 四 書斎 --- その二 --- 悪魔との契約
- 五 アウエルバッハの窖(あなぐら)
- 六 妖婆の廚(くりや)
- 七 街の上
- 八 夕ぐれ
- 九 隣の女
- 十 花園
- 十一 森と洞(ほこら)

- 十二 歌
- 十三 再会
- 十四 煩悶
- 十五 兄の死
- 十六 ヴァルプルギスの夜
- 十七 曇れる日
- 十八 牢獄

悲劇 第二部

- 一 雅致ある土地
- 二 宮廷
- 三 ヘレネとパリス
- 四 小人
- 五 古代ヴァルプルギスの夜
- 六 ヘレネの帰城
- 七 浪漫的の女王
- 八 愛児
- 九 高山
- 十 戦争
- 十一 老夫婦
- 十二 憂いと死
- 十三 薔薇の雨
- 十四 昇天

序曲 天 上

天地の開けた最初の日と同じように清新な匂いに満ちた天上の世界である。真蒼な瀨気(こうき)が芳烈な酒のように湛(たた)えられて居る中に、無数の天球は悉く調和を保ちながら、昔ピタゴラスの学徒が云ったように、美しい階調を響かせながら廻転している。その中央に玉座を占めて居るのは宇宙万物の主(しゅ)である。主の周囲には沢山の天使が群れて居る。ベッケルの説によると之等の天使にも十の等級があるそうであるが、それは何うでもよい。之等の天使を率いるものは、ミヒャエルと、ガブリエルと、ラファエルの三大天使である。この天国の中に、太陽も亦崇高な歌を奏でながら丁度今現われて来る。天使ラファエルは第一に声をあげて太陽の歌をうたう。

太陽は、古のままに、同胞の星の群と、
競歌(きそいうた)響かせながら、
その定められた旅をば、
霹靂(へきれき)の歩みで完うする。
それを見れば天使等(たち)の心は強まる。
誰もそれを究め得ないけれど。
不可思議に崇高な天工は
開闢(かいびやく)の日のように荘嚴である。

主の一行は今地球に近づいているのである。それ故大天使ガブリエルは、

そして速(すみ)やかに、不可思議に速やかに
華やかな地球が自ら廻転する。

という句で始めて、地の美と、日夜交代の妙とを吟誦し、樂園のような明るさと物凄く深い闇との変化や、岩底の上に広い流れとなって泡立つ海の面白さをうたい出す。最高位の天使ミヒャエルは、嵐と嵐が我勝ちに怒号して、海から陸へ陸から海へ往来し、その往来の周囲に甚深な作用の連鎖を引き起こしているのを見、ややもすれば雷電の焰が

道の行く手に破壊の火を燃え上がらせるにも拘わらず、全体は一つの美しい調和をなしているのを讃唱する。果ては三天使が声を揃えて、

これを見れば天使等の心は強まる。
誰もそれを究め得ない故に。
そして御身の作った崇高な総べての天工は、
開闢(かいびやく)の日のように荘嚴である。

と合唱する。其処へ悪魔のメフィストフェレスが主の御機嫌うかがいに出てきたのである。彼の名はメフォストフィレスであると言うことであって、それだとすると「光を憎む者」という意味になる。斯うした悪魔が天国に出入りすることは一見不思議に思われるが、旧約の約百記(ヨブき)にもサタンが天帝の許に出る所があるのであるから、別に珍しいことではない。天国の偉大は実に悪魔をも含んでその為に少しも汚れず一絲も乱れない所にあるのである。

さてメフィストフェレスは自分の下卑た言葉づかいが、天界の天使達の嘲笑の的(まと)なることを気遣いながらも、気取って見たところで一層物笑いになることを知っているので、遠慮なく妙な調子で話し出したのである。

『ええ、旦那様。あなた様がまたお来(い)でになりまして、私(わたし)どもの様子を総べておたづねになりますに就いて、これまで何時も御機嫌よく私にもお会い下さいましたから、御奉公人衆に混じってお目通りを致します。』

彼が斯うした挨拶を述べてから語り出すことは、地獄のことでもなく、また天球のことでもなかった。彼が一番心にかけていることは実に人間の生活なのである。人間の世界から離れて地獄があるかどうかということは別にして、悪魔が主と話の出来る対象となるものは人間を外にしてはならないかも知れない。メフィストフェレスは更に言葉をついで、雄弁に饒舌(しゃべ)り散らした。

『太陽やいろいろの世界のことなんか、私にはわかりません。私の見ているのは人間の苦しんでいる有様丈でございますよ。あの小さい神様は相変わらず同じ性分に出来ていて、天地開闢の日と同じに今でもあなた様が彼奴等(かやつら)に天の光の影をお遣りなさらなかったら、もう少し善く暮らしているでしょうがね。人間はあれを理性と名をつけて、どの獣より獣らしくする為にそれを使っています。まあ、あなた様の前で失礼でございますが、あの長い脚をした蟬(こおろぎ)の一つのように、いつも飛んだり跳ねたりしては、直ぐに草の中でお定まりの歌をうたいます。それで草の中に何時(いつ)までも寝ていればいいんですが、どんな泥土(どろつち)にでも鼻を突っ込むんです。』

悪魔はまず人間の理性を罵(のの)した。人間の理性程悪魔に都合の悪いものはないのである。それを聞いていた主は静かに答えた。

『そちの云うことはそれ丈か。いつも愁訴(しゆす)しに来るのか。地上では永久にそちの気に叶うことはないのかな。』

『いえ檀那様。私はいつもの通り彼処を心から悪く思いますな。人間共が苦患(くげん)の日を送ってるのが可哀想でございますよ。私でさえもあの憐れな奴等を虐(いじ)める気がしない位なんです。』

主は急に言葉を転じた。
『そちはファウストを知っているか。』
『あのドクトルでございますか。』
『わしの下部(しもべ)のことだ。』

メフィストフェレスはファウストをよく知っていた。悪魔に云わせれば、ファウストは実際妙な行き方で主に仕えていた。彼は下界の物は何一つ飲食(おんじ)もせず、湧立(わきた)

つ胸の憧憬の為に身も心も地を離れている。

『自分が愚かなことには半分気がついていますが。天からは一番美しい星を取ろうと思いい、地からは一切の一番高い快楽を取ろうとしているんです。そうして遠いものも近いものも、総べてあの男の飽くことのない心を満足させることは出来ないんです。』

しかし主はメフィストフェレスよりは一層深くファウストを知っていた。現実しか見えず、皮相ばかりを観察する悪魔には知り得ない、人間深奥の秘密が主にはわかっていた。『たとえ彼は今夢中で私に仕えて居ても、私は彼を早晚澄みきった境へ導いてやる。』

樹が緑になれば園丁は、幾年か花や果実が その樹を飾ることを知っている。それと同じにファウストにも花が咲き、実のなる時が来ることを主はもう予想しているのである。

『さあ何をお掛けなさいます。彼奴(あいつ)を檀那さまから奪ってみせます。彼奴をそっと私の路へ引き込むお許しが出来ますとね。』

メフィストフェレスが卑しい賭を望んでいるのに主は答えないで斯う云った。

『彼が地上に生きている間は、そちにそれを禁じはしまい。人間は努力する間は迷うものだ。』

悪魔には主の意味深いこの言葉なぞは耳に入らなかった。彼は死人なんかに構ってることには前から好きではなかった。彼はむっちりと水々した頬(ほっ)ぺたが一番よかった。彼は生きたファウストを自由にする嬉しさに夢中であった。しかし主は強くファウストを信じている。

『よし、そちに任せてやる。あの霊をその本源から引き放して、出来るならお前の道へ引き下ろして見い。そして善良な人間は暗い心の促しに動かされていても、始終正しい道を意識していることを知って、恥ずかしいと思うがよいぞ。』

主との争いが勝てないことは解り切ったことのようなのであるが、人間の理性を不幸の本だと思い、人間の闇黒面のみを見ようとするメフィストフェレスには、その見易い理が見えないのである。

『ようございます。なに長くはかかりません。此賭に負ける心配はないつもりです。私が目的を達したら、精一ぱいの勝ち鬨をあげることを許して頂きますよ。芥(あくた)を食わせてやりますよ。私の姪の蛇のように、喜んで食いますぜ。』

果たしてそうなるであろうか。主は心の底で微笑(ほほえ)みながら、ファウストをメフィストフェレスの自由に任せた。斯うして主の試練が始まったのである。主の考えでは、人間というものは兎角その仕事の手を緩めて恣(ほしいまま)な安息を貪りたがるものである。それを不断に努力させるには刺激がなくてはならない。悪魔の誘惑を主はそういう刺激としてファウストに用いようと思っているのである。それ故彼は自らその誘惑に勝って主の導きに従わなくてはならない。主は天使たちをかえりみて斯う云った。

『神の子の務めとして、お前たちは永遠に動いて止まない生々の力を見、その美を楽しみその愛をいたわらなくてはいけない。それから、よろめき移っていく現象の中に漂っているものを、永遠の思惟によって繋ぎ止めるのだ。』

天使たちと主はやがて見えなくなった。独り残ったメフィストフェレスは卑しい笑みを洩らしながらつぶやいた。

『おれはあのお爺さんに逢うのが好きだ。だから仲を悪くしないように気をつけている。悪魔とでも人間らしく話すのは、大檀那にしては有難い訳さ。』

悲劇 第一部

一 夜

基督復活祭の前の夜は更けて、四囲(あたり)はひっそりと静まり返って居る。高い円天井(まるてんじょう)になって居る狭いゴシック風の書斎の机に向いて椅子に腰を下ろして居るファウストは、つくづくと自分の過去現在を顧みて、底しれぬ不安な心持ちに襲われる。もう年齢(とし)は五十にもなろう。やや白髪(しらが)の交じっているその髪も何となく艶を失っているし、机の上のランプに照らされている額も憂鬱に曇って見えるのに、中古時代の僧侶や学生が着て居るのを常としたその黒い長い服も陰気な感じを強くする。高い壁に沿って作られている数十の棚につまれた書籍や巻物、実験の機械や測量の道具、標本等には、小さいランプの光の及ばない隅が出来て、それがまた一層悽愴(せいそう)な気を漂わせて居る。其処にはまた人間の髑髏(どくろ)さえ並べられているのである。彼は殆どこの書斎の外へ出ないで、唯々知識の追求にばかり耽(た)って来た半生の努力を顧みて、全く得るところの無かったのに絶望の嗟嘆(さたん)を發せずには居られなかったのである。

『ああ、おれは哲学も法律学も医学も、その上慾(なまじ)っか神学なんかまで勉強して、その蘊奥(うんのう)を極めたけれど、おれの馬鹿は昔と少しも変わるところは無い。マギスターとか、其の上のドクトルとか云われて、もうかれこれ十年の間も学生の鼻柱を上へ下へ、右へ左へと引き廻して、教授だの先生だのと云っているが、実は何にも解って居ないのだ。否、何にも我々には知り得ないということが解って来ただけだ。』

彼は考えた。自分は世間の所謂学者や教師等よりは多くの事を知っている。しかしそれで人間を善導し改心させるという自慢もない。又金もない、財もない、光栄もない、名誉もない。一切世間の悦楽もない。これでは犬でも此上生きていようと思うものはあるまい。ファウストは自分が大学の四分科を究めて最早何の疑惑をも持たない所まで達しながら、更に転じて魔法に耽(た)って居る心持ちを振り返って考えた。

『おれは靈の威力と啓示とによって幾分物の秘密が解ろうかと思って魔法術に入った。この世界をその奥底で統一しているものは何であろう。其処に働いている一切の力であり種子であるものは何であろう。』

ファウストは空虚な言葉を玩弄する非自然な知識の世界から出て、広い自然の核心に迫りたいと思った。折から窓の外を見ると、円やかな月が大空高くかかって居る。ああ、斯うやって夜中過ぎまで此机に向いて眠らないでいたことも幾百回かわからない。そうした折々月が憂わしげな顔をして、私の読む種々(いろいろ)の本や紙の上を覗き込んだことも、また幾度ということを知らない。斯ういう可哀らしい光に照らされて、翼ある身ならば翔(かけ)って高山の頂に靈共と戯れることも出来ようものを。ああ、知識の塵の中から脱して、月光の露を浴びながら鬱を散ずることは出来ないであろうか。ファウストの心は大自然の中に身を任せることの気安さと楽しさを思いやった。そうして自分の生活の余りに非自然なのが嘆かれた。思えば自分の住んでる書斎はまるで詛われた鬱陶しい石壁の穴である。空の光も此処の画硝子(えくすり)の入った窓を通して来れば濁ってしまう。書物は蠹魚(しみに)に食われ塵に掩われて円天井近くまで積み上げられている。瓶や缶や、機械や、祖先伝来の家具までが所狭きまでに押し込まれている。此の狭苦しい所が自分の世界でなくてはならない。

『神は人間を生きた自然の中へ造りこんで置いてくれたのに、私は煙と腐った物の中で動物の骸骨に取り巻かれているのだ。』

既に円やかな月光にそそられて、自然に帰ることを望んでいたファウストは、此の惨めな小世界から脱して、広い世界へ逃れようとの熱情に襲われた。そうしてそれを魔法でやろうと思った。彼は傍らの本棚から大きな一卷の書物を取り出した。それは十六世

紀の中葉に仏蘭西で有名だった天文と占星学の大家ノストラダムス(実名ミシェル・ノオトルダム)自筆の秘書である。

『私の案内には之があれば足りる。これで自然の教えを受けたら、星の歩みも知れ、私の霊妙な力も醒めるだろう。』

彼は斯う云って書物を開いて大天地(マクロコスモス)の符を見た。大天地とは日月星辰を含んだ大宇宙のことである。彼は此の符を見ると全く我を忘れた感激と昂奮とに心を奪われてしまった。官能は新しい喜びに燃え、青春の幸福が神経や血管の中に流れ始め、そうして自分が神ではないかと思うまでに心の澄んで来るのを感じ出した。昔の賢人が、「霊の世界は鎖されていない。汝の耳目が壅(ふさが)って、汝の心は死んでいるのだ。起(た)て学徒、誓って退転せず、塵芥の胸を暁天の光に浴びせしむるがいい」と云った言葉は偽りではないと思った。彼は微妙な符に見入りながら考えた。

『何とまあ総べてのものが渾一体を織り、万物が相互に交感しあっているんだろう。天の諸(もろもろ)の力は昇っては降りて、互いに黄金の釣瓶(つるべ)を差し出している。祝福の薫りの高い翼を張って、天から地を貫いて、万物の中に階調を奏でて響いて居る。』

個々に見える宇宙の物も、総べて互いに相連絡し相通じて居る。皮相の観察からは矛盾撞着と見えるものも、其根本の心をたづねると一つであり調和である。ファウストは暫くその壮観に茫然としていたのであるが、やがて夢心地から我に返って見ると、この無辺際な大自然大宇宙を捕捉するには自分の力が余りに小さいことが感ぜられて来た。彼は思わず溜息をついた。

『何という壮観だろう。しかしああ、ただ観物(みもの)に過ぎないんだ。』

見る、知る、それだけではファウストは満足することが出来なかった。感ずる、掴む、味わう、行うのが彼の願いである。彼は憤慨したように顔をふくらせながら、更に魔術の書を繰り広げて、間もなく地霊の符の所に来て手を止めた。

『うむ、此符のおれに感じ具合は余程違っている。これ、地の霊、お前は太(お)おれに近い。』

ファウストの求めるのは天でもなく、大宇宙でもない。彼の心は地上の生活を全く離れることが出来なかった。彼の求めて居るものは実に地上の満足であった。それ故地霊の符を見て太(お)自分に近いことを感ずるばかりでなく、更に新しい酒にでも酔ったように、万難を冒しても之に近づこうとする勇気が湧いて来た。見る見る室内には雲が湧いて月の光は隠れてしまい、灯火の光も消えてしまった。円天井からは陰森(いんしん)の気が鬼気を吹いて、ファウストの頭上には稲妻のように赤い焰(ひら)めいて来た。地霊の近づいて来たことを知った彼は身体が引き締まるような武者震いをしながらも、

『形をあらわせ。形をあらわせ。己(おれ)は命をとられてもよい』と叫んだ。そうして書物を手に取って地霊の咒文(じゅもん)を深秘な調子で唱えようと、不思議にも赤い焰がぱっと燃え上がって、地霊がその姿を現わした。

『己を呼ぶのは誰だ。』

流石のファウストもその異様な霊を見ては思わず顔を背向けないではいられなかった。

『ああ、恐ろしい顔だ。』

しかし地霊は迫って来る。『お前は力強く私を引き寄せて置いて、今になってどうしようというのだ。』

非常な恐怖に襲われて、息も出来ずに小さくなったファウストは、初めの勇気もなくなって叫んだ。

『ああ、己はお前には耐えきれない。』

実際この赤裸々な地霊の出現にはファウストも心を転動してしまった。地霊は単に書物の力で現われたのでは無かった。ファウストの中心の叫びに引き寄せられて来たのではない。地上の総てを支配して、地上の万物の中に活(はた)らいている生命、即ち地

霊に接したいというのが、彼の心からの願望であつたのではないか。

『私はお前の霊の願いによって引き寄せられて来たのに、その恐怖は何事だ。超人を以て自ら任じて、私たち霊と同じ高さの位置に立とうと歓喜の翼を張っていたお前の胸は何処にある。ファウストは何処にいる。私の息に触れた丈で臆病に縮み上がっている虫がファウストなのか。』

斯う辱(はずか)しめられて、彼は再び勇気を奮い起こした。『何の己がたじろくものか。己だ、ファウストだ。お前たちの仲間だぞ。』

でも「地の子」であるファウストと、地の全体である地霊とは、相通ずるものはあつても、結局に於いて同一ではなかった。それ故易く「仲間」だという訳には行かなかった。地霊は自分を説明して斯う云った。

『生の流れ、事業の嵐の中に私は上下し往来している。生死永劫の海の中にいて、「時」のざわめく機(はた)を織って、神の生きた着物を作っている。』

ファウストにはその意味が十分に会得されなかった。漸く落ちついた心になった彼は寧ろ一種の親しみを地霊に感じだして来た。彼は地の一部分に過ぎぬ人間が、地の全体の霊と合致し得るように思い上がったのである。

『広い世界を飛びめぐる忙しい霊よ。己はお前をどれ程親しく思っているかしれないぞ。』

斯う云ったファウストは、

『いや、お前はお前に解る霊には似ているが、私には似て居ない。』

とすげなく云い放って、瞬く間に地霊の消え失せたのを見ると、急に張り詰めた力が抜けて挫けるように倒れたのである。

『お前に似ていないというのか。それなら誰に似ているのだ。神の姿を写している己だ。それがお前にさえ似ていないのか』

茫然として消え去った赤い焰の影を見ていると、コツコツと戸を叩く者がある。

『ああ畜生。あれは内の書生だ。己の最上の幸福が滅茶苦茶(めちゃくちゃ)になる。これ位幻想のあふれている時を、あの無味乾燥な男が忍び足でやって来て妨げなくてはならないとは。』

入って来たのは果たして書生のヴァグネルであつた。長い寝衣(ねまき)を着、寝帽を被って、手には蠟燭を持っている。ファウストは不機嫌らしく顔を背向(そむ)けた。

『御免下さい。あなたが何か御朗読なさるのが聞こえました。お大方希臘の悲壯劇をお読みになったのでございますか。私もあの道で幾分得を致したいと存じます。何でも此処は之が大変よいそうでございます、人が褒めていうのを聞きますと、俳優は牧師の先生になれる程だそうです。』

ヴァグネルは(ゲーテの青年時代に独逸で流行して大学で講義さえされた、)雄弁術を覚えてそれによって利益を得ようと考えて居る。彼はただ空虚な知識を求めて、生命(いのち)の力のない説明者で甘んじているのである。それ故此の二人の話はややもすると滑稽に陥りたがる。特にファウストは頭から冷笑を浴びせかける。

『そうさ、牧師が俳優である場合にはそんなこともあるだろうさ。』

会話がだんだん進むに従って、ファウストはただ冷嘲や皮肉を云ってるのみでは済まされなくなった。彼は知識の形式や説明の手段などに頭を突っ込んでいる弟子に向かって其の誤りを正してやる。雄弁術などというものは抑々末の末である。魂の底から突いて出て、底力のある面白味で万人の心を制するのではなくては何にもならない。切り接(つ)ぎの細工や、他人の御馳走の混合物を捏ね上げたりしたのでは、心を心へ引き寄せる力となることは出来ない。手段や技巧ではない。頭がよく考えが正しければ演説は自然に出来る。ファウストはそう説いた。そうしてヴァグネルが歴史を重んじて、時代を逐う

て人類が進歩したことを知るのは無上の愉快であると云うのに対しては『それは芥溜(ごみため)か、がらくたを打ち込んで置く蔵か』と皮肉な笑いを洩らして、熱心に反歴史主義を説くのであった。

『しかし先生はそう披仰(おっしゃ)いますが、世界とか人の性格とかいうものは、誰でも研究して少しなりとも知り度いと思うものでございますよ。』

『いや、その知ると云うことだが、誰が正しい名で子供を呼ぶことが出来よう。それは稀には少しのことを知って、馬鹿正直に自分の観たり感じたりしたことを世間に明言した人もあるが、そういう人は磔(はりつけ)か火炙りにされてしまった。ああ、彼此(かれこれ)話しているうちに、大ぶ夜がふけた。今夜はこれまでにしよう。』

未だ話して居たかったヴァグネルも、そう云われて仕方なしに立ち上がった。明日は復活祭の初めての日であるから、其の機会にまた二つ三つ質問をすることにしようと、しぶしぶながら帰って行った。

一人になったファウストは、やっとのことで邪魔者を逐い払って清々した心持ちにもなったけれど、無用な事に心を労して、宝を掘ろうと望む手に蚯蚓(みみず)を掴んで喜んでいる弟子を憐れむ気にもなった。また静かに考えてみると地霊の出現が余りに偉大だったので、自分の卑小なことを痛感した結果、絶望の淵に陥りかけていたのを、救ってくれたのはあの男であったというような感謝さえ起こった。実際自分は神の姿に倣(なら)って作られて居るのだから、永遠の真理の鏡に近づいた積もりでいたのに。そうして地上の子であることを忘れて、天上の光明のうちに自分が居るように喜んでいたので。自分の自由な力は自然の脈管の中を流れて、創造しながら神の生を享樂し得るかのようだったのに。何という罰せられ方であったろう。一体人間が地霊に似ようと思うのが、そんなに僭越(けんえつ)なのだろうか。地霊を引き寄せる丈の力のあった自分はそれを止める力がなかった。地霊は自分を雷霆(らいてい)のような声で斥けた。自分は不確かな人間の運命の圈内へ衝(つ)き戻された。誰が自分を教えるのだ。一体人間は内心の促しのままに動いてよいのか知ら。

『ああ、我々の受ける苦しみが、我々の事業そのもののさえが、我々の生の路を塞いでいる。我々の精神が受け取った最も美しいものの周囲にも縁遠い種々のものが附着(くつつ)くのだ。此の世の善に達して見ると、より善きものは虚偽妄想になってしまう。人生が我々に与えた美しい感情は下界のごたくさの中で凝縮する。大胆な空想の喜びも、後から後からと幸福が碎けるのを見ると、自然に狭く小さくならずにはいられない。すると憂いが忽ち胸の奥に巢食って、不安が快樂を妨げる。そしてその憂いは種々の仮面を取り換えて、或いは家屋敷となり、或いは妻子となって来る。火とも、水とも、短刀とも、森ともなる。何でもないことを怖れたり、失わないものを惜しんだりする。そうだ。己は痛切に感ずる。己は神々には似ていない。土をほじくる虫けらに似ているんだ。塵埃の中で身を肥やして生を愉しんでいるうちに、行人の足に踏み潰されてしまうのだ。』

ファウストの考えはだんだん寂しく暗くなって行つた。彼には自分の周囲を埋めている万卷の書籍も、処せまきまでに置かれた機械や道具も、皆一片の塵としか思われなかった。自分を睨んでいるような髑髏も、自分と同じ空虚な苦しみに死んだ人のように思えた。自然の秘鑰(ひやく)を開く可き筈だった多くの機械も要するに何の役にも立たなかったではないか。

『自然は白日の下にも秘密に富んでいて、あの白紗(うすぎぬ)を脱がないのだ。』

こんなことを考えながら、ファウストは周囲の道具類を見渡した。そしてそれが一つとして塵埃のように見えないものはなかった。父祖伝来の器物なぞは売ってしまえばよかったと思った。祖先から譲渡されたものを占有するには、それ丈の働きが必要である可きだ。

『刹那の造った物のみを、その刹那が使うことが出来る。』

そんなことを思っている彼の眼は急に磁石にでも吸われるように棚の上の一つの瓶に食いついて離れなくなった。それには世にも不思議な魔酔薬が入って居る。彼は静かに其の細長い瓶を取り上げながら、夜の森を歩いている時徐(おもむろ)に月が射して来た折のように、心が明るくなって来るのを覚えた。褐色に透き通るその毒薬を覗いていると精神の潮(うしお)が次第に引いて、身はいつか沖遠く誘い出されて、足下には万象の影をうつす水鏡が横たわって居るように思われた。今迄の苦痛は自然に軽くなり、意欲の力は霧の霽(は)れるように薄らいで、瀨気(こうき)の中へ入って行くような、新しい光を見るような、神々の喜びのような喜びさえ湧いて来た。彼は下界の日に背を向けて、だれも恐れる死の門を押し開いて、虚無の中に滅びる危険を冒し乍ら、晴れやかな気分で第一步を踏み出すことが、男の威厳を示すに最も適切なことのように思った。そうして美しい水晶の盃をさえ取り下ろしたのである。

『さあ、長い年月の間己はお前のことを忘れていたが、さあ箱の中から出て貰おう。』

ファウストは斯うつぶやきながら、盃を机の上に置いた。そうして此盃が用いられた昔の饗宴のことをそれからそれと思い出した。此美しい盃が廻される時には、受け取った客の顔色が一層晴れやかに輝いたものだった。そうして美しい盃の絵模様を気のきいた詩句で賛美するのが、飲む人の楽しい義務とされたのだった。

『今日は隣の客に廻しもしない。絵模様己の拙い才を試そうとも思わない。ここにあるのは人を速く酔わす酒だ。己が嘗て精選を重ねて醸したものだ。』

彼は盃に毒酒を注いだ。褐色の液が重く水晶の中へよどんだ。

『この最後の杯をあげて、心から晴々しくこの暁の万歳を祝おう。』

東の空へ高く盃をあげた彼は、今やその薄い水晶の縁(ふち)に唇をあてた。蒼白い夜明けの光がほのかに窓から入って居た。

其時である。復活祭の始まる鐘の音と、天使等の合唱とが近くの教会から響いて来た。云うまでもなく此の天使というのは本当の天使ではない。教会内の選ばれた一定の童児である。

基督はよみがえり給えり。
忍びより来る、世襲の、
破滅もたらす瑕疵(きず)にしも
とりまとわれし
人間に、歓喜のあれ。

その鐘の軟らかい響きと、晴れやかな歌の音いろとに心を奪われたファウストは、思わず唇から盃を離した。今度は女たちの歌声がひびいた。

我等主にまつろえるもの等(ら)
香料をもて
主をいたわり
臥(ふ)させまつれり。

布と紐とにて
清らかにつつまつりぬ。
さるを、あな、基督は
ここに在(いま)さず。

続いてまた天使等の合唱が聞こえて来た。

基督はよみがえり給いぬ。

かのいたましき
救いをばもたらす鍛錬の
試みに打ちかてる、
愛する者に幸(さち)あれ。

しかしファウストが盃を置いて自殺を思い止まったのは、決して復活の神秘を信じたり、古い信仰に帰ったからではなかった。知識にも魔術にも望みを失った彼には、固より信仰はなかった。唯、小さい時から聞き馴れていた歌の響きが、ゆくりなくも今ファウストの胸に少年の日の追憶を喚び覚ました。静かな安息日の鐘の音は屢々少年だった頃のファウストに不思議な憧憬の心を燃えたたせた。彼はじっとしていられなくなって森や野辺を歩き廻りながら、熱した頬に止度(とめど)もなく云い知れぬ涙を零(こぼ)した。そうすると何か自分の為に新しい世界が開くような気がした。今復活祭の歌をきいて彼は丁度その頃のような、幼い感情が心の底からこみ上げて来て、熱い熱い涙が頬を伝って流れたのである。自殺とまで思いつめた一念は、死に直面した瞬間に急転して、深い人世に対する憧憬となったのである。

埋められつつ
生きながら気高き主は
既にみ空へ、
壮麗(いつく)しく昇らせ給いしか。

.....

基督はよみがえり給えり、
朽敗の裳裾(もすそ)のうちより。
汝等は喜びて
絆(きずな)を断ち放て。
いそしみて主を讃うる者、
愛をば証(あかし)するもの、
同胞のごとく食する者、
み教えを説きて旅する者、
喜びを約するもの、
汝等に師は近し。
汝等に師はいます。

復活祭の歌は尚ひびいていた。

二 市門の前

『なぜそっちへ出て行くんでえ。』
『おいら達は獵師茶屋へ行く。』
『おいら達は水車場の方だ。』
『河岸(かし)の茶屋の方がいいじゃねえか。』
『途中がつまらねえや。』
『城村へ行こう。あそこには確かに美形がいるし、麦酒(ビール)も上等だし、面白い喧嘩も出来らあな。』

外出着(よそゆき)に着かえた職工達が、籠から出た鳥のように愉快そうな顔をして、こんな話をしながら通り過ぎてゆく。今日を晴れと着飾った女中が二人、白粉で塗り固めた顔を並べて歩いてゆく。一人は少し拗(す)ねているらしい。

『わたし詰まらないから帰ろうかしら。』

『まあ彼処の白柳(はこやなぎ)の処までおいでなさいよ。屹度来ているわ。』

『来てたって有難かあないわよ。あの人お前さんと並んで歩いてさ、踊場じゃあお前

さんとばかり踊るんだわ。お前さんは嬉しくったって私の知った事ですかよ。』

フランクフルトの郊外を思わせるような或る市門の前の十字路のことである。春とは云っても未だ花の開くには間があるうけれど、総ての物はみんな長い冬の眠りから眼が覚めたように、流れには氷の跡もなく、谷間には希望の幸福が緑いろに萌えている。敗軍の兵士のように山奥へ逃げてゆく冬は、それでも尚残り惜しそうに、青みがかって来る野面(のづら)へ細かい氷の粒を投げつけるものの、日の光はもう凡てを緑に塗ろうとしている。その暖かい春の光を浴びようとして、復活祭を祝う人たちが、暗い市門から、華やかな服装で後から後からと出て来るのである。職業の重い鎖から解放され、頭を押さえつける屋根の下から逃げ出し、肩の擦れ合うような巷や、うす暗い礼拝堂の中から出て来て、自分達も復活の喜びを味わうとするのであろう。

『やあ、どうだ。あの快活(ぴんぴん)した歩きッ振(ふ)りは。あの女たちの後をついて行こう。』

『おい、そう駆け出すなよ。あのあとから行く二人を見給え。まったく清楚(さっぱり)した風をしているぜ。片方は僕の家隣の娘だ。あれが僕は好きなんだ。連れになろうと云うかも知れないよ。』

土曜日に箒を握った手が、日曜には一番よく男を撫でて可愛がるものだと思っている学生と、令嬢を愛している其の友人とがこんな話をしているかと思うと、

『立派な書生さんの癖に女中の跡なんぞ追い廻さないで、私の方でも見ればよい。』などと思って行く良家の娘もある。市長に対する不平を並べる市民があるかと思うと、日曜日や祭日には、他処(よそ)にある戦争の話をするのが大好きだという男も通る。これは人が命の取り遣りをしているのに、自分は茶屋の窓際でビールを飲みながら美しい景色を眺められるのが一層幸福に感ぜられるからである。老人もあれば兵士もいる。沢山の人間を当て込んで、『お情け深い檀那様や、お美しい奥様方』と憐れな声を振り絞っている乞食もある。この雑踏にもまれながら、弟子のヴァグネルと一緒にファウストも散歩に出て来たのである。

彼は沢山の人たちが全く自由になったように、活発に田畑の上へ散って行き、遠い山腹の岨路(そばみち)方にまで種々な色彩の着物が光るのを見たり、沈みそうに思われる程人を載せてゆく河舟を眺めたりして、自分の心も軽くなるのを感じるのであった。之に反してヴァグネルは斯うした原始的な騒々しさは大嫌いであつた。彼は先生と一緒に散歩することを名誉だと思い、其上利益もあろうと思ってファウストと同伴したに過ぎないので、ヴァイオリンの音や、人のどなる声をきくのがつらくて仕方がない。その中ふたりは菩提樹の立っているところまで来たが、その下では大勢の百姓たちが集まって、うたえ踊れの大騒ぎ最中である。

踊りにゆこうとめかした羊飼、
五色のジャケツに、紐、飾り、
流石綺麗に着かざった。
菩提樹のまわりは人ぎみで、
皆(みんな)とうから踊り狂った。
ユフエ。ユフエ。
ユフハイザ。ハイザ。ヘエ。
胡弓の弓がこの調子。

その群衆の中から一人の年寄った農夫がファウストを見つけて近寄って来た。

『やあ先生様でございますな。よくおいでになりました。』

農夫は溢れるばかり酒を盛った杯を取り上げてそれをファウストに差し出して彼の為に健康を祝した。そうした率直な好意をファウストは心から喜ぶことが出来た。

『折角の御親切ですから頂戴しましょう。これで御礼を申して、あなた方の御健康を祝します。』

こうした打ち解けた挨拶ぶりに親しみを感じた人たちが、間もなくファウストの周囲に集まって来た。年寄った農夫は此の祝日にファウストのような大学者が自分達を見舞ってくれたことを心から喜んで、その上ファウストの父が先年村に熱病の流行した時分、村の為に尽力して多くの病人を癒やしてくれたことまで話し出した。そればかりか其頃未だ若かったファウストが、あらゆる隔離所を巡回して歩いたにも拘わらず、無事であることが出来たのは、全く多数の人を助けたのに対する神の報酬であると褒め立てた。大勢はそれに和した。

『どうか先生様も長生きをなさって、此後ともに大勢の人をお救い下さりますように御願い致します。』

『なに人を救うことを教えて下さったり、救いをお授けになるのは神様です。天の神様をお拝みなさるがいい。』

ファウストは心苦しくなっていて、弟子と一緒に急いで其処を立ち去った。ヴァグネルは自分の師と頼む人が非常な尊敬を農夫達から受けてるのに得意にもなり、またそれを羨ましくも思った。しかしファウストの心は全く違う思いに閉ざされていたのである。彼は疲れた足を安めようと思って畑の側の一つの石に腰をかけた。彼が物思いをしながら此石に腰をかけたのは決して今日初めてではなかった。断食や祈祷で身を責めていた頃独りここに来て座ったことも幾度であったろう。その頃の彼は実に希望に燃えている上に、信仰も人並み以上に堅かった。それ故主に御願いして恐ろしいペストの流行を止めて戴こうと、涙を流し、溜息をつき、手の指を組み合わせて祈り悶えたものだった。それを思うと農夫達の感謝をうけるのが、寧ろ嘲(あざけ)られるよりもつらかった。考えれば彼の父にしても彼にしても決して農夫等の思っている程、農夫達の為にはなっていない。彼の父は所謂錬金術を学んだ医者で、その免許取りの一人であった。彼は暗い厨(くりや)で雌雄の金の精を合わせた。雄の精は「赤獅子の血」といい、雌の精は「白鷺の膠(にかわ)」とも「百合」とも云った。これを鼎(かなえ)で合わせて、度々変色させた後に煉丹が出来上がる。それをペストの薬として大勢に飲ませたのである。若かったファウストはその手伝いをしたのであるが、勿論少しの効果もあるとは思えなかった。その薬を飲んで死んだ人は沢山ある。それ故云わばファウスト親子は殺人者(ひとごろし)である。それが却って人から感謝されるのも辛(つら)いのに、魔術めいたことをしたのも、心には咎められた。

『しかしそんな事を御心配なさらなくてもよろしいでしょう。授かった技術を忠実に守ったのは責任を尽くしたというものです。そうして学問を御重ねになって、御父上より一層えらくおなりになるのは結構なことでございます。』

ヴァグネルは斯う云って慰めたけれども、ファウストの心は石のように重たかった。『ああ、此の誤謬の海から浮き上がれるように今でも望んでいられるものは幸福だ。なんでも用に立つことは知ることが出来なくて、知ってることは一つとして用に立たないのだ。』

自殺をしようとして知識に絶望しているファウストの心は暗かった。彼は市民や農夫たちのように単純に自然の恵みを喜ぶことは出来なかった。

西の空にはもう夕陽が落ちようとしていた。緑の畠も、その間に散在する農家も、遠い丘も、水の流れも、見渡す限りのものが黄金色(こがねいろ)に染まり乍ら、何処となく闇の近づくのを知らせるように紫ばんだ靄(もや)の匂いにこめられて来た。彼は落ちて行く夕陽を眺めながら、翼があつたら何時までもその後を追って行き度く思ったのである。

『それでもとうとう夕日は沈んでしまふだろう。しかし新しい願いが目醒めてきて、あの女神の光が飲みたさに、夜を背にし昼を前にして己は駆けて行こう。ああ、美しい

夢だ。』

しかし夢は消え失せる。幻に見る翼が真実(ほんとう)になることは六ヶ敷い。それにも拘わらずファウストの心は抑えようとして抑えきれない感情に駆られて上の方へ、前の方へと押し進められた。

ヴァグネルにはそうしたファウストの胸懷は解らなかった。彼はただ読書欲、知識欲さえ満足することが出来れば何の不幸も不安もなかった。

『君はただ人生の一つの欲望しか知らないんだ。どうか生涯もう一つの方は知らずに居らせ度い。己の胸には二つの霊が住んでいて、それが互いに離れようとしている。その一つは章魚(たこ)の足のようによ下に搦み附いて居り、もう一つは無理に塵界を離れて高い霊の世に登ろうとしている。ああ、此の大気の中に、天と地との間に、そこを支配して漂っている霊があらば、この黄金色の靄の中から降りて来て、己を新しい色彩に富んだ生活へ連れ出して貰い度い。せめて魔の外套でも手に入って、それに包まって他処(よそ)の国々へでも飛んで行き度い。』

ファウストの此言葉を聞いて、ヴァグネルは喫驚(びっくり)してしまった。悪魔は四方八方に群がっていて、千変万化の危害を人間に加えようとしている。それを呼んだらどんな禍が来るかもしれないと思ったからである。しかしファウストの呼んだのはそうした地獄の悪魔ではなくて、天地の間に支配している霊である。そうしてそれは彼を色彩に富んだ生活へ、云わば世間欲の満足へ導くものでなくてはならない。それが「霞(かすみ)の中から降りて来」ればよいと思ったのである。その途端に黒い尨犬(むくいぬ)が忽然として現われて来た。何でもないのであるが、苗や刈り株の間を走って二人の周囲を廻りながら漸次(だんだん)に近づいて来るのが、何処となく不思議らしい処がある。眼の故(せい)か、犬の歩いた後からは火花の帯が飛んでいるようにファウストには思われた。

『来い来い。』

犬は近づいたが、別に変わった風も見えない。二人はもう鼠いろになった四圍(あたり)のけはいに驚きながら、急に冷たくなった風に吹かれて、犬を連れて帰途についた。この犬が悪魔メフィストフェレスであろうとは、ヴァグネルなぞは夢にも思わなかったのであった。

三 書斎 ---- その一 ----

犬を連れてファウストが家へ帰って来た時は、日は既にとつぷりと暮れて、世間も静かになっていた。野性的な人間の本能も眠って、人を愛し神を愛する心の動き始める頃であった。彼は路で拾って来た黒犬が無邪気にも人懐かしげに足許にまつわるのを可憐にながめながら、途中の坂道で駆けたり飛んだりして自分を慰めた代わりに、今夜は暖炉の背後(うしろ)に軟らかな布団の上で寝かしてやろう等と考えていた。

郊外の爽やかな空気に触れて帰って来たファウストは、春とは云っても夜に入れば未だ寒い自分の書斎に入って、親しげに燃えるランプの光に向かうと、自殺をとまで思いつめた過ぎ去った夜とは違って、理性がまた蕾を開いて、心の中まで明るくなったように、生命の泉にあこがれる心持ちになった。勿論彼が自殺をしようとしたのも、決して単純な厭世と悲観とからはなかった。知識や学問で開くことが出来なかった秘密、地霊が彼に拒んだ地上生活の根源を掴み度いという願いが、死によって遂げられるかも知れないという、云わば一種の冒険があゝの毒杯を手にしたのである。復活祭の歌は彼を不可思議に此の世に繋ぎ止めたけれども、彼の胸の中からは満足の感じが全く湧き出さなくなって居た。彼は今も亦そのことを痛切に感じながら、その欠陥をば地上を超越したもので補おうと思った。そうしてそのような天の啓示を聖書の約翰(ヨハネ)伝に求めようと試みた。明らかに信仰からは離れていたファウストの周囲にも幼い時から育てられて来た基督教の空気は未だ可なり濃く漂っていたのである。彼は不安そうにちょこちょこ歩いたり、うなったりする犬を気にしながらも、聖書を開いて、その原文を好ま

しい独逸語に訳し始めた。

『初めにロゴスありき』という最初の言葉で彼は先ず躓(つまづ)いてしまう。ロゴスという原語を「語(ことば)」と訳すことに彼は満足することが出来ない。ファウストは語(ことば)をそれ程尊重することが出来ないのである。それでは「意(こころ)」として見ようか、「力」としてみようか。それでも十分ではない。復活祭の歌以来此の世の生活に心の動いているファウストは「業(わざ)」という訳語を得て始めて安心する。『そうだ。おれは心強く「最初に業ありき」と書くんだ。』

ファウストが熱心に新約全書の翻訳に取りかかろうとすると、尨犬は益々吠え狂って流石の彼もじっとしては居られなかった。新約の中でもルターが最も愛読したといわれる約翰(ヨハネ)伝は悪魔が一番恐れ厭(いと)うものであるからであろうか。ファウストが当惑の末腹をたてて追い出そうとすると、尨犬は見ている間に縦にも横にも大きくなって、目は火のようになり、恐ろしい歯をむき出して、河馬かと思うように変わってしまった。

『何たる妖怪を己は家(うち)へ連れ込んで来たんだろう。よし斯ういう妖怪に対するには「ソロモンの鍵」が一番いい本だ。』

「ソロモンの鍵」というのは咒文で悪魔を追い払う方法の書いてあるものである。ファウストは斯う独語(ひとりごと)を云いながらその本を書棚から取り出した。彼は先ず『四者の咒文』を使って、火(か)、水(すい)、風(ふう)、土(ど)の四つの精が此妖怪にいたら逐い出そうとして見たが、それは終に失敗に終わってしまった。それならばと彼は改めて一層強い咒文を唱えながら基督の十字架を見せて見た。そうすると怪物は暖炉の背後に封じられたまま、膨れあがって像のようになった揚げ句、急に溶けて霧のようになってしまった。それより前から此怪物を救おうとして戸の外には多くの霊共が来ていたのであるが、戸口に護符が貼ってあるので入って来ることが出来ないのであった。

霧になったと思うまもなく、霧は消えて旅学生の服装をした一人の男が暖炉の背後から出て来たのである。それがメフィストフェレスであった。

『お騒ぎになるには及びませんよ。何の御用ですか。』

メフィストは平然とした調子で、少し嘲笑さえ帯びていきなり斯う訊ねた。ファウストも拍子抜けがしたように、

『ではこれが尨犬の精だったのか。旅の書生だな。これは笑わせる。』

メフィストは改めて挨拶の言葉を述べてから、『あなたはどうも私に強(したた)か汗をおかかせなさいましたよ』と云った。ファウストはそれには答えないで訊ねた。

『名前は何というか。』

『おや、それは下らぬお訊ねでございましょう。あなたは語(ことば)というものを大変軽蔑なさっていられますな、そうして一切の仮想から遠ざかって、ただ本質の深みを求めようと努力しておいでではございませんか。』

メフィストの答えは中々皮肉である。

『ではそれはよいとして、一体お前は何だ。』

『不断に悪を欲して、不断に善をするあの力の一部分でございますよ。』

『ふん、その謎めいた言葉の意味は。』

『わたしは不断に物を否定する霊です。』

メフィストが説明するところによると、総ての物は否定されるのが至当でなくてはならない。何故かという生ずるものは皆滅亡する価値のあるものである。だから最初から何にも生じないのに越したことはない訳である。それ故彼は人が呼ぶ罪とか、破壊とか、悪とかいうことを自分の本領としているのである。彼に云わせると、宇宙の一切は闇黒であった。その闇から光が生まれて来た。然るに光は僭越にも母の闇をその王座から引き落として空間を占領しようとしている。しかし物体に固着している光は却って自ら物体に遮られている。それでは早晚光というものは物体と共に滅びるに違いない。そ

うして元の闇にならなくてはならない。彼はその大きな闇の一部分である。

『人間は気まぐれの小天地を作っていて、大抵自分を全体だと思っていますが、私なんかは部分の又部分ですよ。』

『そうか、それでお前の結構な任務がわかったよ。君は全体の上から物を破壊することが出来ないの、小さい所からだんだんに壊してゆこおうというんだね。』

メフィストの返事は割合に正直だった。

『そうです。でも格別なことも仕出かしはしませんよ。海嘯(つなみ)、暴風、地震、火事といろいろな物を持って行って見ても、跡には依然として陸と海とが残っていますよ。それから禽獣とか人間とかいう厄介な奴ですね。あれにはほんと手を焼きますよ。幾ら葬ったかしのれないのに、後から後からと新しいのが出て来るんですからな。こんな風で万物が続いてくのをみると全く気が狂いそうですよ。』

『それでは、そんな空(むだ)なことは止めて、何か少し他の事を始めたらどうだい。』

『そうですね。ちと工夫して見ましょう。しかしそれはこの次にもっと委(くわ)しく御話するとして、今日はこれで御免を蒙(こうむ)りましょう。』

『それは御随意にするがいい。これで近づきになったのだから、いつでも又来給え。さあ、戸口からでも、煙突からでも出るがいい。』

ところがメフィストには出て行かれない理由がある。彼は入って来た所から出なくてはならない。それが悪魔の掟(おきて)である。それなのに黒犬の形になって入って来た戸口の敷居の上にペンタグラム[一種の符号で悪魔除けとせられている。人間が手足を広げた形から来ていると云われる。其の一角が開いていたので、悪魔が入って来られたのである。]の護符があるのである。入って来る時には丁度外向きの一角が少し開いていたので、それが何の差し障りにもならなかったが、今出るとなるとそうは行かないのである。ファウストは悪魔にも掟が支配することを知って、メフィストと契約を結ぶことの不可能でないことを知るのであるが、メフィストは無闇に帰りを急ぎたがる。そうするとファウストの好奇心は余計にそそられて、一刻でも長くメフィストを自分の側に置きたいように思った。

『ではお慰みに何か一つ術をしてお目にかけましょうか。』

『それは結構だ、君の随意にし給え。だが成る可く気持ちのよいのにね。』

『ええ、承知しました。此の一瞬間にあなたの官能の味わうものは、平凡な生涯の一年間に味わうものよりは沢山でしょうよ。』

メフィストは斯う云って、戸外に漂っている霊たちに歌をうたわせた。その歌を聞きながらファウストはうとうとと眠ってしまった。

消えてしまえ、くらい、
目の上の円天井。
やさしさを増して、
覗け、のぞけ
真蒼(まっさおな)大空。
うす闇い雲は、
消えるとよいのに。
小さな星がきらきら、
太陽のような大星も
やわらかに光る。
み空の子供の
霊のような美しさ。
揺れながらお辞儀して
漂って通る。
あこがれの思いが
こなたへ続く。

それから着物の
ひらめく帯が
国々を蔽(おお)い、
四阿(あずまや)を蔽う。
そこには恋人が、
思いに沈んで
生涯を契る。
四阿に並ぶ四阿。
芽をふく蔓(つる)よ、
重たい葡萄の房は、
こみあう酒倉の
桶の中へ飛び込み、
泡立つ酒は
小川のように流れ、
浄(きよ)い宝玉の
川床にせせらぐ。
山の高处を自分の後に、
残して置いて、
緑の丘の
沢山のめぐりに、
広がって海となる。
それから鳥は、
喜びをすすり、
日に向かい翔(かけ)り
波の上に
漂い動く
多くの島を目ざして飛んでゆく。
そこには合唱の
歓び歌うのが聞こえ、
草原を越えて
躍(おど)る人々が見える。
その人たちは皆(みんな)な
戸外で楽しむ。
山を越えて
攀登(よじのぼ)る人々、
海を越えて
泳ぐ人々、
空に浮かぶ人々、
総て生へ、
すべて遠くへ、
愛する星の。
聖なる恵みの。

ファウストは此歌につれて、歌の内容を夢に見るのである。それは主として下界の享楽である。暗い円天井が取り去られ、雲霧が散じて、天使の翼に蔽われた四阿で男女が歓びを尽くしている。酒は流れとなり海となる。それを鳥が飲んで、祝福されたものの島へ飛ぶ。其処には歓喜の歌を合唱している人々があって、やがてその人々も快樂の丘や海や星へと散じてゆくのである。斯ういう下界の歓楽を夢に見せて置いて、メフィストは魔術で鼠を誘い出してペンタグラムの一端を囓らせ、其の隙から出て行ってしまった。

『左様なら、ファウストさん。またお目にかかりますよ。たんと夢を御覧なさい。』
暫くしてファウストは眼をさました。

『己はまた欺瞞(だま)されたのか。夢に悪魔を見せられて、尙犬には逃げられてしまった。これが精神のこもった促しの果てなのか。』
彼は大きな溜息をついた。

四 書斎 ---- その二 ---- 悪魔との契約

ファウストが平常(いつも)の通り書斎に籠っていると戸を叩く者がある。また誰かに悩まされるのかと、不機嫌になりながら彼は振り返って云った。

『おはいり。』

『私です。』誰だか解らない。

『おはいり。』

『三度云って戴きます。』

『厄介な奴だな。おはいり。』

やっと入って来たのはメフィストフェレスである。三度「おはいり」を云わせたのも悪魔の規則に従ったのであろう。彼の服装は此前とは全く異なって、今日は貴公子然としているのである。上着は赤で、それに金糸の刺繍がしてある。その上に羽織って居る外套は絹のごわごわしたものである。鳥の羽の挿してある帽子を被っている上に、尖った剣まで吊している。

『今日は仲善しになれそうですね。実はあなたの憂さ晴らしをしてあげようと思って、こんな風をして来たんです。さあ、早い話ですが、あなたの方でも斯ういう支度をしていただき度いんです。そうしてあらゆる絆を断って、思いのままに人生を経験なさるんですね。』

しかしファウストは急にそんな気にはなれなかった。どんな着物を着飾ったって、此の世の苦痛が遁れられようとは思えなかった。その上当てのない遊戯をするにはもう年を取り過ぎていた。そうかと云って総ての願いを断ってしまうには未だ若過ぎる。

『世間が己に何をくれるものか。欠乏を堪え忍べというのが、人世を通じて時々刻々響いている厭な歌なんだ。己は毎朝日の目を見るのが恐ろしいのだ。願ってる事が一つだって叶えられるではなし、歓楽の予感をさえ瑕疵探(あらさが)しの批評が打ちこわす上に、己の胸の創造を妨碍する厭な事は幾らでもあるんだからな。それを思うと夜の明けるのが泣き出したくなるが、夜は夜で、また恐ろしい夢に驚かされるから、安楽に寝ても居られない。己の胸のうちに住んでいる神様は、心の深い底まで掻き乱すことは出来ても、外界の物を何一つ動かすことは出来ない。それだから、己には世の中に生きてるのは重荷を負っているようで厭で厭で仕方がない。いっそ死んでしまいい度いんだ。』

メフィストは皮肉な微笑を口端によせながら、

『でも死という奴はほんとうに歓迎されるお客ではありませんな。』

ファウストは激して来た。『いいや、勇ましい勝軍(かちいくさ)の光栄の中に月桂冠をいただいて斃れる人や、激しく踊り狂った揚げ句に、恋人の腕に支えられて死ぬ人は羨ましい。ああ、己もあの気高い地霊を目のあたり見た時に死んでしまえばよかったのに。』

『でも誰かはあの晩褐色の薬を飲みませんでしたね。』メフィストは勝ち誇ったように、しかし冷静に云い放った。そんな事まで知ってるのにファウストも内心では驚きながら、口では負けては居なかった。

『探偵が君の道楽と見えるね。』

『へへえ、私は全知ではありませんがね、これで可なりいろんな事を知ってますぜ。』

『うん、あの時は全く心が乱れていたところへ、突然幼かった日の聞きなれた歌を聞かされて、旧い歓楽の余韻に欺かれてしまったけれども、餌や囹(おとり)やまやかして人の魂を縛って、此の悲哀の洞穴に繋いで置こうとするものは、何でも己は詛ってやる。第一に詛わしいのは慢心だ。それから官能をそそのかす現象の幻惑だ。名聞(みょうもん)や死後の誉れも詛ってやる。妻だとか子だとか奴隷だとか云われる一切の所有物を

も詛ってやる。金銭も、酒も、恋の快樂も、希望も、信仰も詛わしい。その上わけでも詛わしいのは忍耐という奴だ。』

ファウストは斯うして地上の一切のものを詛った。知識の蘊奥(うんのう)を極めてその限界に衝突した寂しさを味わった彼は、地上の生活の総てにまた同じような限界があり、従って其処には失望のあることを予想せずにはいられなかったのだ。ファウストは人生から単純な享樂や、官能の満足を求めてはいなかった。其の奥底に横たわっている永遠なものが彼の掴もうと願っている所だった。長い間の学問の研究も一つに其の為であったのに、其の方面では彼は全く失望してしまっていた。そうして何かの方法で一挙に自然と人生の深みを味わいたいという、止み難い願いは未だ彼の心の中に火のように燃え上がっていた。途上に横たわっている障碍を一つ一つ取り除くというような、まだるいことは彼には到底出来難い。それなればこそ忍耐が一番詛わしく思われたのである。彼は「総てか然らずんば無」かを望んでいる絶対の理想主義者であった。彼は人生の受用享樂が何の与えることもない呪わしいものであることを感じていた。しかし少年の時から学問に一身を委ねて居た為に、身に親しくそれを経験する暇がなかった。メフィストフェレスはその隙に乘じようと考えているのである。

ファウストが昂奮してこんな恐ろしい呪詛をすると、何処からともわからない靈の合唱が聞こえて来た。

痛ましい、いたましい、
強い拳(こぶし)で
美しい世界を
お前は毀した。
世界は崩れ倒れた。
半神の人が毀した。
我等はその片屑(かけくず)を
虚無へ運びながら、
失われた美しさを
歎いている。
下界の子の中の
力強い者よ、
前よりも美しく
世界を立て直せ、
お前の胸の中へ立て直せ。
爽やかな感官を以て
新しい生の歩みを
始めよ。
そうすれば新しい歌が
それに応じて響こう。

之はファウストに正しい道を教える善い靈であるか、或いはまた其の背後に測り難い誘惑を持っている悪魔の眷属であるか、それは解らなかったが、メフィストはそれを自分の徒党だと云い張って、頻りに血の循環(めぐり)の悪い孤独な生活から脱却して、広い世間へ出ることを勧めた。大きな猛鳥のように命の根を啄(つつ)く憂いを弄(もてあそ)ぶのを止めて、人間世界の中へ出て見ると、自分がどんなに優れているかということも解って来る。

『世間を渡ってみようという思し召しさえあれば、私は直ぐあなたにお力添えを致しますよ。まあ、兎に角私と一緒ににお出かけになってみて、私のすることがお気に召したら、私は喜んで御家来にでも何でもなりますよ。』

此の世の享樂の総てを詛っているファウストも、さすがに幾分の心が動いて来た。総てを尽くさないではいられなかった彼は、人世の楽しみをも自分で掴んで見、自分で味

わって見なくては承知出来ないところがあった。併し悪魔の云うことを直ぐに信ずる程軽率にもなれなかった。

『そうしたら己の方からは何をしたらいいんだい。』

『いやそんなことは後でも結構です。』

『そうじゃあない。悪魔は昔から利己主義者だから、ただ働きようはあるまい。条件をはっきり云って貰おう。でないと危険で仕方がない。』

『では云いましょう。此の世で私はあなたの自由になって、顎でこき使われましょう。その代わりに、あの世でお目にかかったら、あべこべにあなたが私に使われるということにしましょうか。』

『よかろう、あの世なんか己にはどうでもいいんだ。己の喜びは此地から湧き出し、己の苦しみをこの日が照らしている。此天地から別れた後はどうでもなるがいい。そんなことは己には問題にならないんだ。』

『そのお考えなら一つ奮発してお契約をなさい。その上で早速わたしの面白い術を御覧に入れますから。まだ人間の見たことのない物を御覧に入れますよ。』

斯ういうメフィストの話には勿論駆け引きがあるのである。水々しい赤い頬っぺたが好きで、死人は大嫌いだと云っている彼は、勿論あの世でファウストを使うということに重きを置いてはいはしない。ファウストがあゝの世の事を気にしないのに乗じて、こっそり此の世の歓楽に惑溺させようというのが彼の腹である。又ファウストにして見れば、悪魔風情が見せるもの位で、自分が心を奪われようとは信ずることが出来ない。向上の道にいそしむ人間の霊の深い要求が、悪魔の手で充たされる筈はない。悪魔の見せるものは精々(せいぜい)腹にたまらない御馳走か、水銀のように指の間から漏ってしまう赤い金か、不実な女か、勝つことのない博奕(ばくち)か、あるかと思うと消えてゆく名望と財宝位のものであろう。斯う思ってるファウストは段々に云い募って来た。

『己が落ち着き払って安楽椅子に寝るようだったら、其時は万事休すだ、甘い言葉で己を欺いて、己に自惚れ心を起こさせ、歓楽で己を貶(けな)すことがお前に出来たら、それが己の最後だよ。賭をするぞ。』

『宜しい。』メフィストも腹の裡で嗤っていた。

『己が或る「刹那」に向かって「まあ待て、お前は実に美しいから」と云ったら、お前は容赦なく己を縛りあげてよい。己はそれなりに滅びてもよい。葬(ほうむ)りの鐘が鳴ってよろしい。其刹那にお前の勤めは免ぜられる。時計が止まって、針が落ちてよい。己の一生は終わるがいい。』

『よくお考えなさいよ。忘れはしませんぜ。』

ファウストは力を入れてそれを保障した。しかしメフィストは口約束丈では承知が出来なかった。彼は証書を書かせた上に、血で署名してくれと云い出した。

『それでお前の気が済むのなら、下らない為草(しぐさ)だが異存はない。』ファウストは立ち所に血書したのである。メフィストはそれを受け取って非常に喜んだ。

『血というものは全く特別の汁ですよ。』

ファウストにはメフィストフェレスの疑い深いのが寧ろ不思議に思われてならなかった。彼が今メフィストと約束することは、自分も出来る丈の力を入れて為てみようと思っていることである。地霊には排斥されて自然の戸は開けることが出来なかった。思索の糸は切れて総ての知識に飽きている。今残っているものは官能の世界の奥に分け入って、燃え立つ情熱の渴を癒やすことである。そうした官能の満足が結局何物をも贖(もたら)すことの無いのを彼は知り過ぎるほど知っていた。それなればこそ悪魔との契約に血書することも出来たのである。ただ彼は自分の寂しさ、もどかしさ、空(むな)しさ、苦しさを何うにかしなくてはならない。得難いものを求めて止まない心を、何かで陶醉させなくてはならないのである。時の早瀬の中、事物の逆巻く中へ躍り込んで、休むことなく身体を働かしさえすればいい。苦楽成敗は彼の問題ではない。最も苦しい享楽と陶醉、愛する憎悪、爽やかな憤悶、何でもあれ、全人類の受くべきものを一身に引き受けて、それを心の奥深く味わい、自分の霊で人間の最上甚深のものを掴んで、自己を即

人生になるまで拡大し、人生そのものと共に滅びようというのがファウストの当面の切ない願いである。

こういう理想主義的な、浪漫的な考えは、現実のことにしか眼を向けない悪魔のメフィストには理解されようが無かった。

『まあお聞きなさい。わたしは何千年という間この堅い料理を嚙んでいますから知ってます。揺籃から棺桶までの道中で、この祖先伝来の醗酵種をこなす人間はありませんよ。あればただ神様の為にあるんですぜ。』

そう云われるとファウストは却って反抗的な気分になった。

『でも己はやってみる。』

『さあ、おやりなさるもいいでしょうが、それには詩人の空想でもお借りになるのが一番でしょう。』悪魔の皮肉は却って彼を激させた。

『しかし、努力しても人生の頂上に達することが出来ないとしたら、己は一体何物なんだ。』

『あなたは結局あなたですよ。幾ら立派な鬘(かつら)を被っても、幾尺も高い靴を穿いても、あなたは依然あなたですよ。』

メフィストは冷ややかに斯う答えた。その中には否定することの出来ない真実があった。ファウストもそれを認めずにはいられなかった。現実主義者のメフィストは何時も斯うした点で夢想家のファウストに事実を教えるのである。

『己もそういう気がする。己は徒に人間精神のあらゆる宝物を掻き寄せてみたが、最後に静(じつ)と座って見ると、内から新しい力も湧いては来ない。己は毛髪(かみのけ)一本の幅ほども高くはなっていない。無窮なものには一步も近づいてはいない。』

斯うしてファウストがまた元の絶望に帰ってしまえば、悪魔の誘惑は全く水泡に帰さなくてはならない。メフィストは少し狼狽(あわ)てながら遮(さえぎ)った。

『いや、先生、それは物事を余り通俗に見るというものです。我々はもっと伶俐(れいれい)にやらなくてははいけません。それでないと人生の快樂が逃げ出してしまいまさあ。なに、箠棒(べらぼう)な。成程あなたは二本の手と足しかありません。しかし何でも勢いよく御自分が享樂すれば、それだって同様に御自身のものですよ。私が六頭の馬の代金が払えれやあ、その馬の力は私のものでしょう。そいつに駆けさせれやあ、私は立派に二十四本の足のある男でさあ。さあ思い切って出かけましょう。理屈なんか考えてるのは愚の骨頂です。』

『それで手始めには何うするんだい。』

『直ぐ此处を出てゆくんですね。これは宛然(まるで)拷問場です。自分も退屈した上に、弟子まで退屈させたって何になります。自分にも解らない事を小僧だけに教えられますか。あ、そうそう、小僧と云えば丁度今一人廊下に来ていますね。』

それは此土地へ来たばかりの一学生で、ファウストの名を慕って訪ねて来ているのであるが、彼はもうそれに逢う勇氣はなかった。それを見たメフィストはファウストの上着と帽子を借りて、ファウストに化けて学生に逢おうと云い出した。

『あとは私の才智にお任せなさい。四半時(はんとき)しか要りません。その間に楽しい旅行の準備をなさって下さい。』

部屋を出て行くファウストを見送って、メフィストは凄(こ)い嘲笑の眼を光らせて居た。

『へん、人間の無上最高の力だという理性や学問を蔑視(めつし)するがいい。そうして魔法に身を任せて偽の心を増長(ぞうちやう)させるといい。そうすれやあ先生こっちのものだ。----先生不斷に前へ前へとゆく精神を運命から授かったものだから、其の慌ただしい努力の為に、地上の歡樂を飛び越して来ちまった。彼奴(あいつ)を連れて、これから己が乱暴な生活や、平凡な俗事の中へ引っ張り込んで、腕(もが)かせたり、こびりつかせたりしてやるんだ。飽くことを知らない嗜慾(しやくよく)の唇の前へ旨い料理をみせびらかしてやる。先生癒(な)やし

難い渴えに悶えるだろう。そうなれば悪魔に身を委ねなくたって、矢張り破滅せずにはいられまい。』

こんな独語を云っていると、間もなく新しい学生が入って来て、丁寧な初対面の挨拶をした。ファウストに化けたメフィストは鹿爪らしい様子の中に、折々皮肉な真理を混ぜながら、大学の四つの分科に就いての意見を述べて聞かせた。実のファウストは疾うに四分科を究めてそれに飽いているのに、この学生はいまから四分科を修めようとするのである。メフィストは先ず論理学が物の順序を正すことを説いて、しかし活動している物質を認識しよう、記述しようとして精神を度外していると評し、形而上学をすすめながら、述語が重要だと語ったり、講義を聞く前に善く調べて置くと先生が本以外のことは何一つ云わないのが解ると素破抜(すっぱぬ)いたりした。法学に対しては一番嘲笑を含まない真面目な意見を述べて、法律制度の弊を穿って、人間生来の権利を問題としないことを嘆いた。神学に対して最も敵意を示したのは悪魔として無理はなかったが、最後に医学の話となると、全く馬脚を出して悪魔ぶりを発揮してしまった。

『医学の要領は何でもないさ。君は大天地と小天地とを究めるんだが、つまりは矢張り神のみ意(こころ)のままにさせて置くのさ。君がいくら学問をしようと思ってあっちこっち歩いても、学ばれることしか学ばれないんだよ。だから何でも旨く機会を捕らえるに限るよ。そうして女に取り入るんだね。』

煙に巻かれた学生が記念帖に『汝等も、神の如く、善悪を知るならむ』という句を----これはアダムとイヴを誘惑した蛇の言葉の末節である----書いて貰って帰ってゆくと、丁度旅支度の出来たファウストが部屋から出て来た。

『これから何処へ行くんだ。』

『お好きな処へ。小天地から大天地を見にゆきましょう。なかなか面白くて有益ですぜ。』

『しかし己には気楽な世渡りは出来そうもない。他人の中へ出ると自分が小さくばかり思えるんだから。』

『なあにそんなことは御心配はありませんよ。自信が出来ると直ぐ処世の道はわかって来ます。』

『時に馬や下男や車は何処にあるんだ。』

『それには及びません。この外套をひろげれば、我々は空を渡って行けますよ。や、新生涯にお入りになるのをお祝いいいたします。』

メフィストが作った瓦斯で二人は苦もなく地から浮かび上がって飛び去って行った。行く先はライブチッヒにあるアウエルバッハの窖(あなぐら)で、そこには学生の卒業宴会がある筈である。

五 アウエルバッハの窖(あなぐら)

ライブチッヒに今でも残っているアウエルバッハの窖という酒場がある。その地下室に四五人の大学生が飲んでいる。もう夜も更けたであろう、外の客は皆帰って此の一组だけになっているが、酔いが廻るにつれて騒がしさは益々大きくなるばかりである。

『さあ大いに飲み、大いに笑わないと承知しないぞ。いつでもぼうぼう燃える癖に、きょうは湿った藁のようになっていやあがる。』

斯ういうのは騒ぎ役を引き受けている初年生のフロッシュである。

『それあ君の故(せい)だ。君が何にも提供しないからだよ。あの馬鹿気たことも、穢(きたな)らしいことも。』人に騒がせて自分は少し気取っていようというのは二年生のブランデルである。二人が喧嘩をしかけると、『喧嘩をする奴は戸口から出しちまえ。胸を開いてルンダでも歌わないか。さあ、やれやれ、ホルラア、ホオ。』

と調停をするのは、もう先輩になっているジイベルである。酒が面白くなって、女には

逃げられる側の学生であろう。頭は禿げて、腹が太鼓のように大きい。もう学生気分を半分失って俗人じみて居るアルトマイアーも『うるさい、うるさい』等と云いながらも、矢張り仲間になっている。

『アア、タラ、ララ、ダア。』

『アア、タラ、ララ、ダア。』

咽喉の調子が整うと、種々の歌がうたい出された。フロッシュが『神聖羅馬帝国』の歌をうたい出すと、ブランデルは政治の歌は大嫌いだと云って茶々をいれる。『恋の歌』をうたい出すと、失恋したジイベルの気に入らない。

『東西、東西。僕が処世の術を心得ていることは諸君も御存じの通りです。僕のいうのを聞き給え。此処に女に迷った人達があります。その人達への餞別に分相応の忠告を致そうと思います。謹聴々々。最新型の歌のはじまり。反復(くりかえし)の句をしっかりと合唱して下さい。』ブランデルは斯んな前口上でうたい出した。

鼠が一疋(あなぐら)の巣に居りました。

餌には脂(あぶら)とバターばかり。

ルター博士みたように、

腹を大きくふとらした。

それにおさんが毒をやった。

鼠は世界が狭くなった。

身うちに恋でもあるように。

皆は声を合わして怒鳴りたてた。『身うちに恋でもあるように。』

心配余って昼日中(ひるひなか)、

台所へと駆け出した。

籠の側でぶち倒れ、

びくびく、憐れな虫の息。

毒をやった女は嘔き出した。

へへえ、此の世のお暇(いとま)だ、

身うちに恋でもあるように。

小天地の入り口として、メフィストがファウストを連れて此処へ来たのは丁度皆がこんな歌をうたって、やんや、やんやと云ってる時であった。斯うして借金の催促が来ず、二日酔いで頭痛のしない間は、面白可笑しく暮らして居る連中を見せたら、世間が何れほど気楽に渡れるかということが、ファウストにも解るだろうと思ったからである。

学生たちは見なれない二人の姿を見て、からかう気になったが、何となく気味の悪いところもないではなかったので、探るようにじろじろと二人を見ていた。メフィストが跛(びっこ)であることにもジイベルには気がついた。メフィストは馴れ馴れしく、

『どうでしょう。そちらへ割り込んでも御邪魔にはなりませんか。旨い酒なんかは無さそうですから、面白い話でも其の代わり聞かせていただき度いものですが。』

『君等は多分リッパッハを遅くたったんだろうね。彼処(あそこ)のハンス君と夕飯でも一緒にやって。』

リッパッハというのはナウムブルクとライプチヒとの間にある場所の名で、リッパッハのハンスと云うと昔から馬鹿の通称になっている。それ故フロッシュのこの言葉は、云わば君達は馬鹿だと云うに等しかった。メフィストは素知らぬ顔でやり返した。

『生憎今日は逢わずに来ましたが、この前に逢った時、あなた方の事をいろいろ噂をして、どなたにも宜敷くとのことでした。』

忌々しがっている学生たちの機嫌を直す為にメフィストは西班牙流行の歌だと称して蚤(のみ)の歌という風刺詩を歌ってきかせたりした。昔一人の王様が蚤を一疋可愛がって、それに立派な着物を着せて大臣に任命して、その兄弟までも高位高官に据えたとい

う筋である。

男女の宮人(みやびと)は
その為ひどく悩まされ、
お妃(きさき)さまも宮女でも、
ちくりと蟄(さ)され、かじられる。
でも潰してはなりません。
搔いて除(よ)けてもなりません。
己たちなれば、蟄(さ)されると、
直ぐにひねって潰しちゃう。

初めは冷笑して聞いていた学生たちも、ついその歌の面白さに釣り込まれて、

己たちなれば、蟄(さ)されると、
直ぐにひねって潰しちゃう。

と合唱して大騒ぎをやる。メフィストは序(つい)で酒をご馳走すると云って、机の上に錐で孔をあけて各自の好きな酒をその孔から噴き出させて皆を驚かしたり、喜ばせたりした。彼はその様を見てそそるようにファウストに云った。

『これが自由の民ですよ。御覧なさい。何と気楽なものじゃありませんか。』

しかし大学生の酒宴などは見馴れているファウストの眼に何の刺激にもならなかった。

『おれはもう立ち去り度い。』

『まあ、今からが面白いんです。盛んに獣性が発揮されますからね。』

そう云っている中にジイベルは酔っ払って酒を少しばかり床の上に零(こぼ)すと、不思議にもそれが火になって燃えあがった。

『鎮まれ。』メフィストが斯ういうと火は直ぐに消えてしまったが、治まらないのは学生たちの怒りであった。

『これは何だ。待ちやあがれ、唯では済まさないぞ。一体我々を何だと思っている。』

『もう一遍こんな真似でもして見やあがれ。』

『己たちの眼をかすめる積もりなのか。』

『待て、鉄拳を雨のように降らすぞ。』

皆が口々に罵っていると、アルトマイアーの前の卓(テーブル)からは、盛んに火が噴き出して来た。

『それ魔法だ。やっちまえ。』

それッとはばかり皆がナイフを取ってメフィストに斬ってかかると、メフィストは落ちつき払って真面目な身振りをしながら呪文(じゅもん)を称(とな)え出した。

『虚妄の形と詞(ことば)は心と処を変える。此处に彼処にあれ。』

すると皆は驚いて暫時はただ茫然と立っていた。

『ここは何処だ。いい景色だなあ。』

『葡萄畑だ。本当かしら。』

『葡萄の房に手が届く。』

『こんなよい蔓がある。こんな好い葡萄がある。』

学生たちの眼には窖が一度に葡萄畑になってしまった。そうして葡萄だと思って互いに鼻をつかみ合った。その間にメフィストとファウストとは酒樽に跨がって戸口から出て行ってしまった。酒樽が飛行機でもある様に、空中に浮いて二人を運んだのである。

『誤謬(あやまり)よ、眼を蔽う布を去れ。』

皆が夢から覚めたように、『やあ君の鼻だったか。』『痛かったぜ。骨身にこたえた。』

『あいつらは何処へ行った』なぞと立ち騒いでいる時分には、二人の姿は疾うに見えなくなっていた。

六 妖婆の廚(くりや)

ファウストがメフィストフェレスと契約を結んだ瞬間は、ファウストが道徳的に一番弛緩していた時であり、また自暴自棄に陥っていたどん底であった。しかしファウストの性格の根本に高貴なものが横たわって居る上に、学者としてのこれまでの生活は全く純粋な汚れのない空気に充ち溢れて居た。それをメフィストフェレスの考えているような墮落の海に陥(おとし)れることは、もともとそう容易なことであり得よう筈はなかった。それをアウエルバッハの酒場のような所へ連れて行って、一気に誘惑しようと考えたのはメフィストフェレスの大きな勘定違いだったのである。そこで悪魔は方向を変えて今度はファウストを妖婆の廚へ連れて行って、其処で若返り方を行おうと企てるのである。人生を享樂するにも、大天地小天地を知り味わうにも先ず第一に若い心と肉体とがなくてはならない。血気の未だ収まらない頃でなくては、楽しみも深くないと共に、誘惑の毒もその効果(ききめ)が思うようには行きかねる訳である。

悪魔の外套に包まれたり、酒樽に乗ったりして自在に飛び廻るメフィストフェレスのことだから、何処をどう通ったのかファウストにはよく解らなかったかもしれないが、二人はいつか妖婆の廚へ入って来た。恐らく何処かの山の中であつたろう。何となく陰鬱で昼か夜かと迷うような薄暗い光のさしている一室である。低い竈には火が盛んに燃えていて、その上には大きな鍋がかかって居る。鍋からは濛々と湯気が立ち昇っているが、その中には種々の不思議な形が現われては消えてゆく。それは悪魔が人間に授ける虚妄の世界であらう。ファウストとメフィストが此処へ入って来た時には主人の妖婆は丁度煙突の孔から宴会へ外出した後であつて、其処には家来の尾長猿の牝と牡とが子猿たちと一緒に番をしている。牝はしきりに煮え立つ鍋の中を攪拌(かきまわ)して、それが鍋の縁から噴き零れないように注意している。胴が短くて長い尾がだらりと垂れているのさえ気味が悪いのに、頭が大きくて眼が凹んで居る此の動物は、醜い黒い手さえ持つて居るのである。ファウストは見るからにと胸をつかれるような厭わしさに、思わず顔を背向(そむ)けたのであるが、メフィストは斯うした醜穢(しゅうわい)な畜類を見て同胞を見るような嬉しさに胸を躍らせた。

『さあ御覧なさい。何という意気な奴等でしょう。私は斯ういう奴と話をするのが一番好きですよ。』
なぞと云って居る。

薄暗い部屋の天井と周囲の壁には、用途の解らないような妙な道具や家具が置き並べてある。その一つ一つが何だか薄穢く濁って、魔法臭いのが不快である。斯んな所へ連れて来なければ人間一人若返らせることの出来ないメフィストフェレスは、悪魔甲斐もない何という意気地無しなんだろう。ファウストは斯う考えると腹が立って来た。

『私は気狂染みた魔法騒ぎは大嫌いだ。君は私に婆さんの指図を受けさせて、此の腐敗(くされ)料理で年を三十も後へ戻してくれるというのかい。これ以上の智慧が君にないとなれば、私は最う駄目だ。希望の影は消えてしまった。一体これまでに自然か哲人かが一つ位靈藥を発見して居そうなものじゃないか。』

罵(ののし)られたメフィストは平然として答えた。

『又理屈をこねだしましたね。それやあ他に自然的な若返り法がないことはありませんがね、それは全く別な本に書いてあるんですよ。』

『そうか。私はそれが知り度いんだ。』

其処でメフィストは田野に暮らす農民生活をファウストに勧めるのだった。鋤鋤を取って土を耕し、狭い範囲の中に身も心も閉じ籠めて、単純な食物で身体(からだ)を養い、家畜と共に起臥して少しの不満をも感じない。そういう生活が出来れば八十の高齢に達しても尚若くて居ることが出来るというのである。しかしそうした狭隘な世界に甘んずる程ならば、初めから悪魔と契約なんか結びはしないのである。広い世界のあらゆる生活を享(う)け味わって見たい。そうして其底に溢れて居る永遠なものを確(しっか)りと

握って見たい。それがファウストの切ない願いである。

『私にはそんなことは出来ないよ。』

『じゃあ仕方がない、妖婆の御厄介になるんですな。』

『だがね、何故こんな婆さんの世話になるんだい。君はその薬を自身で作ることは出来ないのか。』

『それはあなた余計な暇潰しというものですよ。これには学問と技術ばかりではなく辛抱が必要ですからね。此薬の醗酵を力強くするのは時間ばかりです。調合は悪魔が教えたんですが、悪魔にはそれをゆっくり拵えている暇がありませんよ。』

斯う云うメフィストの言葉には深い意味がこもっていた。これ迄の慣習と、躰と教養とが作り上げているものを破って、新しく若い心にし、硬張(こわば)り縮んだ官覚を軟らかに緩めて種々の誘惑に動きやすくするには、魔法と雖も長い歳月を必要としなければならない。今ファウストに飲ませようとする薬の中には長い時間が溶解して居る。妖婆の廚の訪問は短いように思われても、実は其間に長い歳月が経過して居るのかも知れないのである。

妖婆の帰りを待つ間メフィストフェレスは尾長猿どもと楽しそうに戯れて居る。

『おいお前たちは何を攪乱(かきまわ)して居るんだい。』

『うすい乞食汁を煮ています。』

『するとお客が大勢来るんだな。』

詰まらない作物が出て、盲者(めくら)千人の世間に大歓迎をうけることを諷したらしい斯んな会話も取り交わされる。子猿共が世界に倣(なら)えた大きな丸(たま)を玩具(おもちゃ)にして転がして居ると、親猿は毀れ易いからと云って注意している。盜賊を見現わすという不思議な篩(ふるい)をメフィストが見ていると、尾長猿は寄ってたかつて彼を一つの椅子の上に座らせた上、手に拂塵(はたき)を持たせて、之で王様が出来たなぞと云って大騒ぎをしている。これは仏蘭西の革命をでも当てこすったものだろう。そんなことに少しも興味を持つことの出来なかったファウストはこの時、偶然にも壁にかかった一つの鏡の中を見て、全く心を奪われてしまったのである。彼はその大きな鏡に歩み寄ったり、また歩み遠ざかったりして、霧のように、月夜のようにやや朦朧としている鏡の中に写って居る一人の女性の姿から眼を離すことが出来なかった。半ば横たわっているその姿は、チチアノの描いたヴィーナスにも似て居るが、全く天という天の統合された精を見るような美しさである。近寄ろうとすると靄のように消えそうになる此の鏡の中の姿こそ、女というものの一番美しい姿だとファウストは思った。

鏡に映る女の美に酔ったようになって居るファウストを見て、メフィストはだんだん自分の罫の中へ引き摺り込もうとするのである。

『まあ差し当たりはたんのうするまで見て居るんですね。今にあなたにああいうのを見つけてあげますよ。實際好い運の廻り合わせであんな娘の婿になって、それを家へ連れて来る者は幸福者(しあわせもの)ですな。』

ファウストが心を惹かれて居るのは第一に美である。メフィストフェレスには女性の美なんかは第二義第三義である。否寧ろ問題ではないのである。婿になって、家へ連れて来ることが女性に対する唯一無二の願いである。彼は努めてそうした食欲をファウストにも起こさせなくてはならない。

『さあ此冠を血と汗でおつけ下さい。』

なぞと妙な冠を持ち出して来たりしてメフィストと遊び戯れて居た猿どもは、お陰で鍋の番をおろそかにした為に、此の時鍋の中のものは急に沸騰して煮え汁が火の中へ零(こぼ)れ出した。火は汁の為に大きな焰をあげてその焰が煙突の中へ入った。すると俄にけたたましい叫び声をあげて妖婆がその中から飛び降りて来た。

『あう、あう、あう。畜生共め、罰あたりの豚奴(め)。鍋はほうって置くし、主婦(お

かみ)さんには火傷(やけど)をさせやあがるんだな。』

怒り立った妖婆は見馴れない二人を見つけて、更にいきり立った。

『どいつだい一体、人の留守に来やあがって、何の用があるんだ。骨まで焼いてくれるから見やあがれ。』

其処にあった泡除けの匙を取り上げるや否や、いきなり鍋の中の汁をしゃくって、メフィストやファウストや獣たちに弾きかけた。獣達は恐ろしさに狼狽(うろた)えて片隅へ縮(ちぢ)かんでしくしくと泣き始めた。すると黙って居たメフィストは持って居た掃塵(はたき)を逆手(さかて)にとって、其処らに並んで居る硝子器や、土器を片端(かたっぱし)から擲(た)き毀しにかかった。汁は零れるし、破片は凄まじい音を立てながらと薄暗い床の上に散らばった。流石の妖婆もこの突然な狼藉に逢って、憤りながらも驚いて後退(あとずさ)りをしたのである。

『やい骸骨め、己を見忘れたのか。お師匠様を忘れたのか。赤い胴着と、帽子にさした鶏の羽がわからないのか。名告(なのり)をしなくちゃ此己がわからないのか。』

やっと気が静まると妖婆も始めてメフィストの顔が解ったのである。角や、尻尾(しっぽ)や、爪などは全く隠してしまって、一見貴公子然としている上に、馬の蹄を(ひづめ)をつけている足にさえ腓腸(ふくらはぎ)の贗物をくっ付けているのだから、妖婆が見忘れたのも無理ではなかった。

『そこで旦那方の御用向きは。』

『実は例の薬をたっぷり一杯貰い度いんだ。一番年数を食ったよい奴だよ。』

『お易い御用でございます。此処に一瓶わたしのちびちび舐めるのがございます。もう少し臭くはありませんから、これを一杯差し上げましょう。』

妖婆は斯ういいながら、眼付けでメフィストを側の方へ呼び寄せて、『ですが、御承知の通り禁厭(まじない)なしにあの方が食(あ)がると、一時間と生命がありませんが、それでよいのでございますか。』

メフィストは早口に、『いいや、あれは大事な友達だからね、よくきく一番上等を飲ませてくれ。それから例の圈(わ)をかいて呪文を唱えてくれるといい。』

『はい、はい。』

妖婆は直ぐに準備に取りかかった。床の上には怪しげな圈がかかれて、其中へは種々なものが並べられた。その中の硝子と金属とで出来てる器具類は自然に不思議な響きを出して音楽を始めだした。妖婆は更に尾長猿をその圈の中へ連れ込んで、其の一疋を卓にして其上へ厚い大きい書物を載せ、他の猿たちには炬火(かがりび)を持たせ、厭がるファウストを無理遣りにその圈の中へ引っ張り入れて、さて大げさな表情で勿体ぶりながら、厚い本を朗読し始めた。

『汝須(すべから)く会(え)すべし。一より十を作れ、二は去るに任せ、直に三にゆけ。斯くて汝は富まむ。四は失えよ。五と六とより、妖婆はいう、七と八とを作れ。是に於いて成就す。九は一、十は無なり。是妖婆の九九の法なり。』

この『鍊金術上の七星』という小冊子の始めに似て居る無意味な数の遊技は、ただファウストに頭痛をさせるに過ぎなかった。メフィストはそれを三位一体の論に引っ掛けて詭弁を弄(もてあそ)んだけれども、勿論ファウストの注意をひくことは出来なかった。妖婆はそんなことには斟酌せずに尚読み進んだ。

『夫れ学問の高き力は、万人の窺い知らざる所なり。而して思慮せざる者贈り物として之をうく、労苦するを須(もち)いず。』

メフィストフェレスの催促で妖婆はやっとその朗読を止めたが、今度はいろんな不思議な方式を繰り返して、若返りの薬を盃に注ぐまでには可なり時間がかかった。こんな魔術めいた儀式に飽々したファウストが、漸くその盃を手にとって唇をあてがうと、その中から小さな燄(ほのお)が微かに立ち上った。彼は思わず一瞬間躊躇したが、メフィストに励まされて一気にそれを飲み干した。

妖婆が圈を解いてファウストが圈の外へ出ると、『さあ、威勢よく戸外へお出でなさい。静(じっ)としてはいけませんよ。薬の効果(ききめ)をよくするには発汗させなくては駄目です。』メフィストは斯う云って彼を急いで連れ去ろうとする。妖婆は妖婆で淫らな歌の本をファウストに渡して、それを読むと、薬の効果(ききめ)が一層よく目に立つだろうという。しかしファウストの心は未だ最前の鏡の像に残っていた。

『もう一度、ほんの一目でよいからあの鏡を覗かせてくれ。あの女の姿は実に美しかったから。』

しかしメフィストは之に応じなかった。

『いけませんよ。いけませんよ。今にあらゆる女の手本になるようなのを生身(いきみ)で見せて上げます。』斯う云って置いて、狡猾(ずる)そうに声を小さくして付け加えた。『あの薬がきいてると何んな女でもヘレエナのように見えますぜ。』

ヘレエナというのは希臘第一の美人で、トロヤの戦争の原因となった女であることは言うまでもあるまい。併し魔術の鏡に映って居た女性を決してヘレエナではなかった。また後に彼の恋人となるマルガレエタでもなかった。云わば「永遠の女性」の影であったのであるが、メフィストは先ず女性の美を好餌にして、若返った後のファウストを肉欲の渦に陥れようと考えたのである。その作戦は必ずしも拙劣ではなかった。また全く不成功に終わったとは云い難かった。しかしファウストの胸の中、否人間の心の中には悪魔の計量し得ない或るものが深く巣喰っていた。それをメフィストは知らなかったのである。